

## 南吉の安城高女赴任前後のこと



新美南吉(本名正八)は昭和13年4月から、愛知県立安城高等女学校の教師となった。この動機は、彼の中学時代(旧制半田中学校)の恩師であり、当時安城高女の校長でもあった佐治克己氏のカズエによるものでもあった。彼の日記(3月6日)によれば「佐治先生が、遠藤先生の宅に参られ、僕を呼んで、「今日やっと、県の方の話がついた。」といわれた。これでとうとう、話がきまったのである。」と記されている。東京外語学校を卒業して二年目にして念願の中等学校教員になることになった。日記には、なお続いて「下手な小説は、もう書けなくなった。一ついいことがあれば、一つ悪いことがあるものだ。が、むろん、後の方の不都合は何でもないことだ。「女学校の先生になれば、もうなんの恥ずかしい事があらあずに。いっぺん、女学校でも中学校でも先生になってくれれば、もう明日死んでもええと思っとつただ。」と、母はいった。父が、小心の父が、あまりの喜びで狂いださねばいいと、そんな心配をした。これでもう、体もあまり無茶はできぬ。治・温・厚・卓」と書かれている。

南吉自身の心の高まりを如実にあらわした文である。(中略)就職はこのようにして決まったのであった。(中略)昭和11年3月に、東京外語学校を卒業して以来幾多の苦しみ(病気、貧困など)を経て喜びをかみしめたのであった。外語学校卒業と同時に中等学校教員になれなかったのは、在学中からだが弱く、軍事教練にあまり出席しなかったからだともいわれている。そのためか彼の免許状は昭和13年3月17日付の免許となっている。

安城高女就職以前の日記は3月15日で切れている。(中略)それでは、日記では知ることのできない赴任当時の模様については、どうであつただろうか。まず、当時安城高女で国語と図工の担当をしていた戸田紋平氏の話をはじめとして、教え子たちの回想などよりどころにして記してみたい。

戸田紋平氏の印象によれば「昭和13年4月、始業式の準備でゴツタ返している職員室へ、佐治校長が案内してきた長身瘦身の青年があつた。イガ栗頭、濃い眉の下にツブラナ小さな眼、長い鼻、今にも動きそうにピンとはった大きな耳が印象的だつた。校長の紹介に次いで「よろしくお願ひします」とぶっきらぼうにぴょこりと頭を下げて、そのまま突っ立っていた。これが南吉。

新美正八君だった。> 一同僚にはこんな感じのする南吉であったのであろう。これが安城へ足跡を残した彼の第一歩であった。戸田氏は南吉とは初対面ではあったが、かねて校長より彼のことについては知らされていた。童話を書いていることや、身体が健康でないことなどであったようである。



また一方、新一年生であった相沢芳子さん(旧姓佐藤)は、入学式当日の印象として<新美先生とはじめてあったのは、安城高女の入学式の日でした。昭和13年4月4日、女学生としての嬉しさにあふれて登校したその入学式で、担任の先生として紹介されたのがご新任の新美先生でした。

(中略)

型通りの入学式がすみ、一年の教室へ来ました私たちに、新美先生は「これからみんなの名前をおぼえるから、廊下の両側に一列に並ぶように。端から自分の名前をいいなさい。」復誦なさってから「自由に学校内を見学してよろしい。途中であったら名前をいうから、まちがったら訂正をしてほしい。」そして本当に一度に五十何名かの生徒の名前を、おぼえておしまいになったのにはびっくりしました。年齢もお若くて、都会的な洗練された先生にその後学校中の生徒たちが、憧れ尊敬したものでした。英語、現代国語、作文と私たちは三課目を教えていただいたのですが、その授業内容の充実したよさは、もったいないほどのものでした。東京の女学校では、あの先生の授業のような素晴らしさには、一度もあったことはありません>

入学の喜びとハンサムな若い教師へのあこがれがうかがえる文章であるが、南吉の記憶のよさといおうか、非凡さをすでに入学式当時生徒は感じていたようである。相沢さんは一年をおえて東京へ転校しているが、授業のある一面では、当時の東京でもないほどの魅力があったことが知られる。

もうひとりの教え子加藤千津子さん(旧姓山口)は、南吉の入学式の印象を「正八というお名前と本人の感じとは、イメージがちがうと思いました。先生は洗練された、さわやかな清潔な感じの方でした。やや線が細い感じでしたが、目に特徴があり、きりっとしていて、ジッと見られるとこわいという感じの方でした。」と話されたが新一年の生徒にうつった南吉のとぎすまされた一面でもあろう。

また、入学式当日の思い出について、馬場貞さん(旧姓後藤)は、上級生の方に聞いたことですがと前置きをして、「汽車の中で先生がいることを知らないで『今度学校へ変な男の先生が来るそうだよ。』という話をしていた人がいた。そのことを聞いた先生は、講堂での新任のあいさつでうわさを気にしてか『こんなハンサムな新美です』といわれた記憶があります。」と話してくださいました。いわゆる彼の自信のほどがうかがわれる態度とも考えられる。

南吉が就職した年の学校の生徒数などについて都築久義氏は <各学年とも一学級で全校生徒200名程、職員は校長の他に11名というスタッフであった。南吉の担当は全学年の英語、一、二年の国語、及び一、二年の農業担任であった。> と南吉ノートに記している。この学級で

は卒業までにいくらかの転出入はあったが四年間というものは、直接彼の指導を受けた人たちであり、日記を書くことによって成長し、詩作に目を開き、自然をすなおに自分の目で見とどけ、ことばに表現することを会得し、彼の文学に対する情熱の影響を強く受けた生徒たちであろう。



南吉の授業の楽しさについて馬場さんは「私は先生に教えていただくようになって作文が好きになりました。幾度か文集に出していただき、当時学校へ行くこと、とりわけ先生の授業を受けることが楽しくて、朝になるのが楽しみでした。」と語られたが、南吉の指導力を物語るにふさわしいことばであろうと思われる。さらに続けて「先生は日記や作文を提出すると必ず赤インクで批評してくださいました。この内容がまた新鮮とでもいいでしょうか。いわゆるフレッシュであり、よいにつけ悪いにつけうれしく思いました。」と話され、「本当に私たちのめんどろをよく見てくださったと思います。」と結ばれた。

また同様に、加藤さんも日記のことについて「一年生の時、よく自由日記をつけたものです。一週間に一回くらいだったと思いますが、点検がありました。内容ではずい分思いきったことが書けました。遠足のおり、みんなで語り合った友情のこと、心理状態、人間とは、という題でよく書いたものです。それに対して必ず赤インクで同感だとか、またいろいろな批評のことばがありました。それをそっと見るのが楽しみでした。」と日記に書かれた評の行きとどいていたことを話されたのち、生徒自身の先生を見る観点の変わったことについて「入学当初に比べ、三、四年生になると批判的になりました。先生の考え方といましようか、思想といふのでしょうか、とにかく他の方々とは違った先生独自のものの見方が感じられました。いわゆる自信過剰な面が感じられたものです。これは生徒として、また女として私たちが先生によって目覚めた結果だと思えます。」と語られたが、南吉の性格をひと言にして指摘するにふさわしいことばであろう。

南吉に指導を受けたよい思い出として、さらに加藤さんは「先生にめぐり合ったことが、人生の方向を決めたといってもよいと思います。まず書物に親しむようになったことや、次に物事を詩的に鑑賞することなどです。苦しいこと、つらいことを美化できることも先生の指導の結果だと思われます。」と結ばれ、教えを受けた一生徒の気持ちとして、尊敬の念をもって率直に話された。

南吉もこれらの人たちとともに教師として、また詩人として戦時下の安城で短い人生を歩んだのである。こんな師弟のうるわしいつながりが、戦後あの苦しい時代に教え子たちによる詩碑建設につながったのであろう。

(「ででむしの歌」所収「雪とひばりの周辺」) 尾関文啓 1971